



**MINISTÈRE
DE L'ÉDUCATION
NATIONALE,
DE LA JEUNESSE
ET DES SPORTS**

*Liberté
Égalité
Fraternité*

Concours externe du Capes et Cafep-Capes

Section langues vivantes étrangères : japonais

Exemple de sujet pour l'épreuve écrite disciplinaire

À compter de la session 2022, les épreuves du concours externe du Capes et du Cafep-Capes sont modifiées. [L'arrêté du 25 janvier 2021](#), publié au journal officiel du 29 janvier 2021, fixe les modalités d'organisation du concours et décrit le nouveau schéma des épreuves.

Sujet zéro
Capes externe et CAFEP
Japonais
Épreuve écrite disciplinaire

Ce sujet zéro ne préjuge pas des thèmes et axes qui seront au programme du CAPES de japonais à partir de la session de 2022.

L'épreuve comporte deux parties que le candidat abordera selon l'ordre de son choix :

- **Une composition en japonais**
- **Une traduction (version)**

COMPOSITION EN JAPONAIS

「現在の中の過去」のテーマについて、それぞれの次の3つの資料の比較分析に基づいて問題提起をし、構築された論文を日本語で書きなさい。

資料 1 :

父は、K共同墓地に埋葬する死亡者の名簿を、どのような経緯があったのかは知らないが、最初から作成することを思いついていたようだ。人手の少ない時期に、遺体を埋葬する作業だけでも労力のいる大変な作業なのに、あえてそれを行ったのだ。

名簿は、氏名や年齢、本籍地などを調べて一覧表にして、通し番号が付されていた。

- 5 その名簿だけでなく、父には、さらに一人一人の死の詳細をも記録する意図もあったようだ。一覧表にした名簿とは別冊にして、死者の死亡原因や、戦死地、あるいは生前の様子などの記入が試みられた名簿もある。

- 10 父が、なぜ、このような作業にまで手を広げていこうとしていたのかは分からない。ただ、私にも、このような作業が困難であっただろうと思われる具体的な場面を、何度か目撃したことがある。今に至って、思い当たるのだが、父は、よく人々に殴られては、地面にはいつくばっていた。たぶん、だれかれなしに、しつこく死者の身元や原因を尋ねて、煙たがられていたのだろう。

村人だけでなく、野戦病院の医者や米兵、さらに日本軍の捕虜や民間人の収容者からも、死者の身元を、しつこく尋ね回っていた。

- 15 「お前はスパイか」

「そんなことをしたって、飯の種にはならんぞ」

「やめとけ。死んだ者は生き返らん」

父は、周りの人々から口汚く怒鳴られていた。また、激しく突き飛ばされ、土の上に四つんばいになり、口から血を流している父の姿を見たこともある。もちろん、無視され、邪魔にされることも多かった。それでも、父は、あきらめずに、黙々とその作業を続けたのだ。

伯父は、当時、G村の区長をしていたから、たぶん、米軍の野戦病院から、埋葬作業を依頼されたものと思われる。

(略)

当初は、名簿を作るという父の行為を、村人たちは賛成していなかったように思われる。坑を掘るという作業が、滞ることもあるからだ。実際、父は身元が判明するまで、葬ることを差し止めることもあったようだ。そんな父と、遺体の腐乱が進まないうちに早く埋葬しようとする村人たちの間には、^{あつれき}軋轢もあったようだ。

しかし、やがて、そのような軋轢も消えて、村人たちの間にも、なにがしかの使命感が芽生えていったように思われる。皆が力を合わせて、その仕事に取り組んでいた。名簿を作るというその行為に協力する者さえ出てきた。

私の記憶の中の一つに、父が夕日に照らされながら小さな墓標を立てている姿が浮かんでくる。一人一人の遺体を埋めた場所に、父は、手作りの墓標を立てたのだ。板面だけでなく、多くは丸太木を削って、墨で黒々と死者の名簿を記しただけの質素なものだった。

(略)

埋葬地には、日を重ねるにつれて、そんな墓標が増えていった。それは、男の子たちが遊んでいる竹馬の杭が並べられて、土に突き刺さったようにも見えた。しかし、時には、土の中から死者たちの腕が、ニョキニョキと芽を出して、空しく空を掴んでいるように見えた。

大城貞俊「K共同墓地死亡者名簿」2008年

(川村湊編『現代沖縄文学作品選』講談社文芸文庫、2011年)

資料2：

十日が経った。徳正は窓から裏庭の夏草を眺めていた。水が止まってから、兵隊達は二度と現れなかった。それでも一人で寝るのが不安で、三日の間はウシにベッドの

横の床で寝てもらった。口とは裏腹にウシもまんざらではないようだった。明かりを点けっ放しにしたまま、自分が寝たきりになっていた間の村の出来事を聞きながら、
5 水を飲みにきた兵隊や石嶺のことを話そうかと迷った。しかし、結局話せなかった。これからも話すことはないだろうと思った。ただ、体調が回復したら、ウシと一緒にあの塚を訪れてみたいと思った。戦争中、ここに隠れていたのだ、とだけ言い、花を捧げ、遺骨を探すつもりだった。そう決意する一方で、自分はまたぐずぐずと時間を引き延ばし、記憶を曖昧にして、石嶺のことを忘れようとするのではないかと不安にな
10 った。あれほど飲まないと言った酒も再び飲み始めていた。町で袋叩きにあってから家で寝込んでいる清裕を見舞った日、居合わせた遊び仲間に誘われるまま酒を飲んだ。両手を骨折りして、ストローで泡盛を飲んでいて清裕が酔いつぶれた後も酒盛りは続き、そのうち花札が始まった。翌朝、門の前で寝ていた徳正を蹴り飛ばすと、ウシは物も言わずに畑に出ていった。

15 ^{あちやー}明日から^{はる}や^{いじ}畑に出でてい、働くんど。

そう自分に言い聞かせて、体馴らしに伸び放題の夏草でも刈ろうと、物置から鎌を取ってきて裏庭に下りた。腰のあたりまで伸びた雑草の勢力にあきれながら、ハブがないか棒切れで草の根元をあちこち叩いた。何か固い物に当たって棒の先が跳ね返った。草を薙ぎ払いながら進むと、^{ぶっそうげ}仏桑華の生垣の下に、徳正でも抱えきれそうにな
20 い巨大な^{すぶい}冬瓜が横たわっていた。濃い緑の肌に産毛が光っている。溜息が漏れた。軽く蹴ってみたが動きもしない。親指くらいもある蔓が冬瓜から仏桑華に伸びている。長く伸びた蔓の先で、黄色い花が青空に揺れていた。その花の眩しさに、徳正の目は潤んだ。

目取真俊「水滴」1997年（文春文庫、2000年）

資料 3 :



ポスター「第一徴兵」昭和10年代 製作者不明

TRADUCTION (Version)

Vous traduirez en français le texte suivant :

戦後五十余年を経て、「戦争体験を語り継ぐ」ことの重要性がますます叫ばれている。沖縄戦の語り部たちも今や七十歳前後の高齢となり、次世代への継承の課題は切迫感を帯びたものとなっている。例えば、ひめゆりの同窓生たちは言う、「戦争を知らない世代が人口の過半数を超え、戦争体験も風化しつつある今日、しかも、核の脅威にさらされる昨今の国際情勢を思うとき、私達は、私達の戦争体験を語り継ぎ、戦争の実相を訴えることで、再び戦争をあらしめないよう、全力を尽くしたいと思います。」と。しかし、このことばは果して未来の担い手である「教室」の生徒たちに届いているのだろうか。

そんな中、一九九七年度上半期の芥川賞を沖縄の若き作家、目取真俊氏の『水滴』が受賞した。自ら戦争体験を持たない作者による沖縄戦とその後の「五十年」の重さを一人の男の実存を通して描いた小説作品を、やはり「戦争を知らない世代」の教師としてさらにその下の世代の高校生が教室で読むことの意味を、この小論では考えていきたい。

沖縄修学旅行が一種の流行になっているようだ。特に、戦時中避難壕等で使われたガマ（自然洞窟）への集中が問題になっている。これは、それほどまでに平和教育が充実し追体験学習への生徒の関心が高まっているということの意味しない。実際に、ガマを案内するボランティア・ガイドグループ「沖縄平和ネットワーク」によれば、事前学習もせず、まるでお化け屋敷気分でガマに入ろうとする学校が増え過ぎて対応し切れないし、ガイドした後の虚しさからネットワーク自身の存続が危ぶまれるほどだそうだ。沖縄修学旅行の一つのモデルを作った丸木政臣氏の「私たちの『平和』学習のねらいは、最終的には子どもたちに『命どう宝』を体全体でつかませることだろうと思っている。」というフィールドワークの実践から学ぶことは多い。一九九〇年に入ってから、私の勤務校でも試行錯誤を繰り返しながら、追体験学習を核にしたコースを組み立ててきた。生徒は、旅行終了後に作成する「文集」や総括会議の討論の中でひめゆり同窓生 M 先生の講演の感想やガマの印象を述べ、いかに修学旅行の前後で意識が大きく変化したかを発表したり、卒業してから再び個人的に沖縄を訪れひめゆり資料館で感想を書き留めてきたという OB や修学旅行が進路選択の決め手になったと語る三年生もいる。しかし、完成した「文集」を読み通してみると、どこか一本調子な実体のないことばの羅列に時として虚しさを覚えることがある。また、ガマにもぐ

って涙を流した生徒が、翌日伊江島に向かうフェリーの中で迷彩服を着た米兵を見つけるや否や駆け寄ってニコリピース写真を撮っている。こんなことも大体毎年のように見られる光景である。一体、なぜなのだろう。特に、米兵による少女暴行事件から、名護市の住民投票にいたる一九九五年から一九九七年にかけて、学年全体の責任者として沖縄修学旅行にかかわってきた私としては、自らの実践に対して懐疑的にならざるをえなかったのである。ここには、「戦争を語り継ぐ」とか「戦争の悲惨さを教える」といった力の作用——一方からもう一方への垂直な関係——では、捕捉しきれない死角が存在しているのではないか。

（幸田国広「『五十年の哀れ』と向き合う——『水滴』（目取真俊）教材化の試み——」
（『日本文学』、48-2号、1999年）より抜粋、一部改変